



薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした  
個別面接の進め方

支援者用  
マニュアル

# 目 次

## I. このツールを使用する前に

1. 家族に対する支援・介入の重要性 ..... 1
2. 家族の支援・介入を行う際の基本姿勢 ..... 1
3. 回復のロードマップと支援者の役割 ..... 3
4. このツールの使い方 ..... 4

## II. 面接相談の進め方

1. 支援者に求められる基本的態度とスキル ..... 5
  - (1) 基本的態度
  - (2) 会話の基本スキル (O・A・R・S)
  - (3) 助言や知識を伝えるためのスキル (E-P-E)
  - (4) 家族の行動の変化を促すためのスキル
2. インテーク・アセスメント ..... 13
  - (1) インテーク・アセスメントシートの使い方
  - (2) インテーク・アセスメントシート
3. 緊急対応を検討すべき状況と対応方法 ..... 16
4. 継続面接 ..... 18
  - (1) 今日の相談シートの使い方
  - (2) 今日の相談シート
  - (3) 薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム  
～ファシリテーター用マニュアル～を活用するためのリスト



I. このツールを使用する前に

# 1. 家族に対する支援・介入の重要性

薬物依存症の治療や回復を考える時に、なぜ家族が重要な存在として注目を浴びるのかというと、そこには二つの理由があると思われます。

まず一つ目は、薬物依存症者本人の回復に対して家族の協力が大きく関わってくることです。薬物依存症は治療を必要とする精神障害の一つでありながら、本人は自ら治療を受ける意思がないことが非常に多く見受けられます。そのような状況の中でも、家族が上手に対応し、治療に関する提案ができるようになることで、本人が治療を受け入れる可能性は高くなるでしょう。この病気はいつでも再発する可能性があります。その再発を防ぐためにも、身近な家族にはできることがたくさんあるのです。実際に、支援者が家族に対する介入を行うことにより、薬物依存症者の予後を改善することができたという研究結果が、これまでに多数報告されています。

二つ目の理由は、家族自身のことです。長い間本人の薬物問題に巻き込まれ続けた家族の多くは、心身の健康に問題を抱えながら生活しています。これもまた過去の研究で広く実証されていることですが、薬物依存症者を持つ家族の中には、家族自身が精神的なケアを必要としている人も少なくないのです。このような家族に対して支援介入を行うことは、本人の治療や回復と切り離して考えても非常に重要なことであるといえます。

# 2. 家族の支援・介入を行う際の基本姿勢

相談機関等に登場する多くの家族は、薬物問題の発覚に非常なショックを受けていたり、暴力や借金など薬物関連の問題への対処に長い間追われ続けてきたりしているため、心身ともに消耗し混乱しています。まずは家族の様々な思いをしっかりと受け止めて気持ちの安定をはかり、信頼関係を築きながら現状の正しい理解や整理を助け、希望を持って今後の支援計画を共に考えていくことが必要になります。

そのために、支援者が特に着目すべきは、家族の「自責の念」や「無力感」です。家族自身が意識しているかどうか、また、言葉で直接表現しているかどうかはともかく、非常に多くの方が、家庭の中の薬物問題について自分を責める気持ちを感じています。「自分の子育ての仕方が悪かったから子どもが薬物を使うようになってしまった」「なんとか薬物をやめさせようと考えられる全てのことを必死でやってきたのに結局事態は好転せず、どんどん悪くなるばかりだ」「家族を救うことができない自分自身を不甲斐ないと感じる」など、とても肩身の狭い思いをしながら、やっとのことで相談の場を訪れたであろう家族の気持ちを理解しようとする姿勢が必要です。

罪責感について過敏になっている家族のことを考えると、相手のとらえ方によっては、家族や家庭に問題があったために薬物問題が生じたとか、家族の対応のまずさが薬物問題の深刻化を招いているといった誤解を与えかねない言葉は極力控えるべきでしょう。代わりに、薬物問題は家族も含む幅広い環境や本人の問題など様々な要因が複雑に絡み合っ生じてくるという事実を伝える必要があります。また、これまで薬物問題の解決をはかろうと懸命な努力をしてきた家族に対してはその熱意と行動力を評価しつつ、それでも本人が薬物をやめようとしないのであれば、それは薬物依存症という病気にかかっている可能性があること、また、そうだとすれば、薬物問題が解決しないのは家族のせいではなくて、依存症という病気のためであることを説明する必要もあります。

信頼関係を築くためには、支援者は家族を批判したり責めたりする気持ちがないこと、これまで様々な苦勞をしてきた家族に対して敬意の気持ちを持っていることが伝わるような関わりが不可欠です。その上で、せっかく頑張っているのに回復に向けて効果が得られないような家族の言動は減らし、その代わりに、回復に役立つような言動を増やしていけるよう働きかけます。

最後に、家族と本人の回復を支援するためには、それぞれの状況や段階に応じて様々な資源を利用する必要が生じてきます。そのため、常日頃から地域にどのような活用できる資源があるのか把握しておくことや、可能であれば実際に足を運んでみて、そこでどのような治療が提供され、また、どのような活動が行われているかなどについて知っておくことが必要になります。

図1 家族に対して支援介入を行う際の7つの基本姿勢

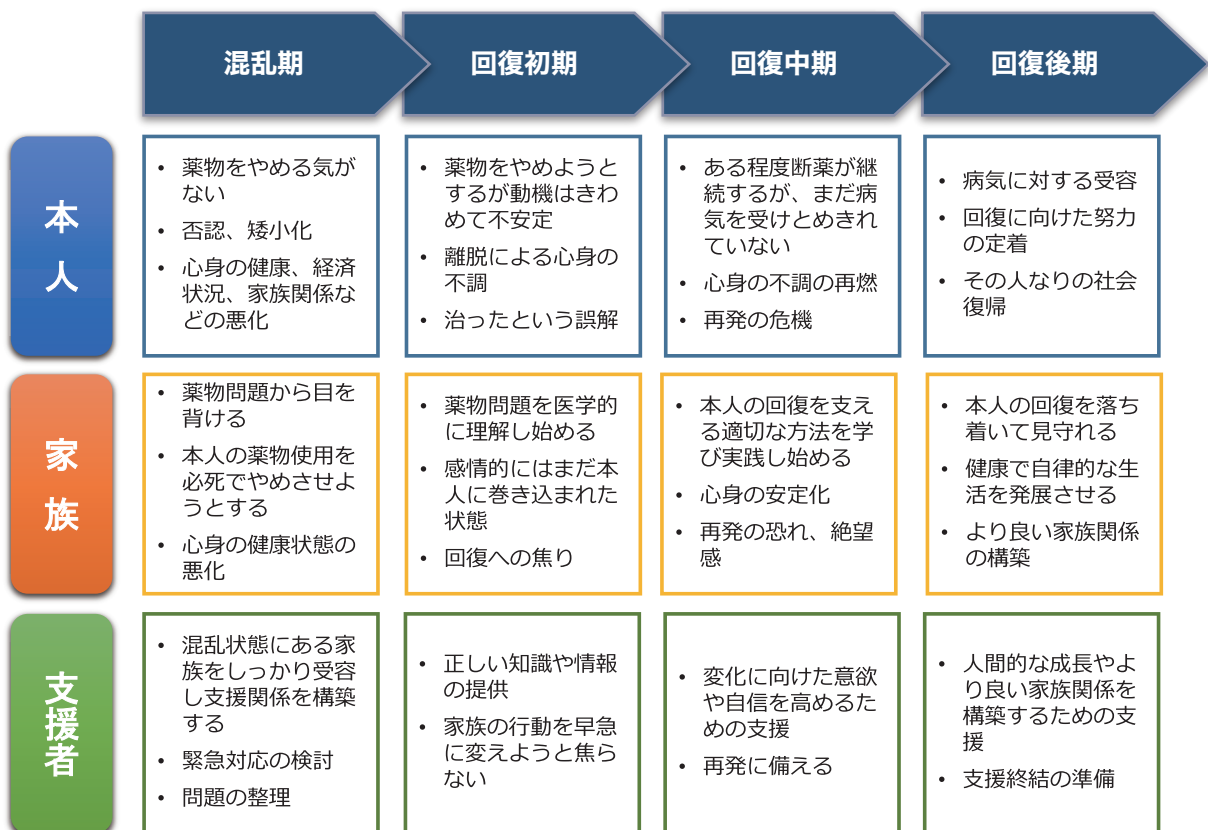
- 家族を責めたり批判したりしない。
- これまで様々な努力をしてきた家族に対して敬意の気持ちを表す。
- 「自責の念」にとらわれすぎず、「希望」をもち未来のために行動できるように働きかける。
- 薬物依存症という病気や家族関係など、現状を正しく理解できるよう支援する。
- 回復のために効果がない関わりを減らし、効果のある関わりを増やせるよう支援する。
- 共に支援計画を作成し、適宜見直ししながら、継続的に支援を行う。
- 家族及び本人が利用できる地域資源についてよく理解しておく。

### 3. 回復のロードマップと支援者の役割

本人の回復にも、家族の回復にもそれぞれの段階があります。どの段階にどれくらい留まるかは個人差が大きく、いったん次の段階に移っても戻ったり、繰り返したりすることも少なくありません。また、本人の回復と家族の回復が必ずしも同じ早さで進むわけでもありません。

支援者自身も本人や家族の段階によって、不安になったり心が揺さぶられます。そのような中でも、家族や本人の大まかな回復の道筋を把握し、今どのあたりにいるのか見当をつけたうえで関わるができることとよいでしょう。どの段階にあっても、できる支援はあります。変化を焦りすぎず、今最も必要な支援を着実に提供することが、次のステップにつながります。

図2 回復のロードマップと支援者の役割



## 4. このツールの使い方

このツールは、薬物依存症者をもつ家族の面接相談を円滑に行うためのものです。「依存症の家族相談はあまり経験がない…」 「依存症の家族相談に自信が持てない…」 という方にはぜひご活用いただければと思います。

支援者が効果的に面接を行うためには、基本的な相談援助技術が必要となります。初回面接を行う前には、必ず「支援者に求められる基本的態度とスキル」をよく読み、しっかりと理解するようにしましょう。最初から完全に使いこなすのは難しいと思いますので、面接の後にも読み返し、自らの面接を振り返るなどしながら、少しずつ慣れていくとよいでしょう。

ツールは、動機づけ面接法の手法を多く取り入れています。また、「薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム」（以下、家族心理教育プログラムと記す）と連動する形で作成されています。プログラムは、国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部のWebサイト\*からダウンロードすることができます。相談内容によっては「家族心理教育プログラム」と関連しないこともあると思いますので、無理に連動させる必要はありません。

\* 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部のWebサイト

<http://www.ncnp.go.jp/nimh/yakubutsu/reference/index.html>

表1 ツールの使い方

時 期	● 実施すること	☆ 留意すること	該当ページ
初回面接の前	● 支援者の基本姿勢やスキルを確認する。 ☆ スキルは最初から完全に使いこなそうと考えず、面接の前後に自ら振り返るなどして、少しずつ慣れていく。		「1. 支援者に求められる基本的態度とスキル」 (pp. 5-12)
初回インタビュー アセスメント面接	● 「インタビュー・アセスメントシート」を活用して面接を行う。 ☆ 緊急対応に関わるような項目については最初の電話で聞き取り、対応の遅れを防ぐ。		「2. インタビュー・アセスメント」 (pp. 13-15)
緊急対応	● 緊急対応の必要性を検討し対処する。 ☆ 周囲とよく相談しながら、早急に調整を行う。		「3. 緊急対応を検討すべき状況と対応方法」 (pp. 16-17)
継続面接	● 「今日の相談シート」を活用して面接を行う。 ● 「家族心理教育プログラム」を活用する。 ☆ 家族とともに「今日の関心事・テーマ」を設定したら、その日の面接の目標を達成するために「家族心理教育プログラム」を活用できそうかどうか検討してみる。 ☆ 「家族心理教育プログラムを活用するためのリスト」の中に、家族の関心事・テーマに合った内容が見つければ、プログラムの該当箇所も使いながら面接を進める。		「4. 継続面接」 (pp. 18-20) 「家族心理教育プログラムを活用するためのリスト」（巻末付録）







## II. 面接相談の進め方

# 1. 支援者に求められる基本的態度とスキル

## (1) 基本的態度

### ● 共感

「共感」は、相談者である家族と自分を重ねてその考えや気持ちに同意することではありません。家族のありのままの状態や気持ちを批判や非難なしに受け止め、その苦悩や喜びを正確に理解しようとすることです。共感が支援者の中だけに留まることなく家族にもきちんと届くように、支援者は言葉や態度で「共感」を示すことが大切です。



相手の言葉を繰り返すなどして共感を示しましょう

### ● 傾聴と間違い指摘反射

「傾聴」とは、言葉の背後にある様々な思いや感情まで理解し受け止めようとするのですが、傾聴の邪魔になるのが、「苦しんでいる・困っている人を援助し正しい方向に導きたい」という支援者の職業的習性であり、「間違い指摘反射」とも呼ばれるものです。例えば、「子どもの携帯電話をこっそり開いて、売人や悪い仲間の連絡先をすべて消してやったら子どもが家で大暴れしました。あの子のためを思ってやっているのに、親の気持ちも知らないで…」と話す家族に対して、「勝手に人の携帯を見てはいけません。本人との境界線を持ちましょう」と正論で返せばそこで面接が終わってしまいます。そういう時は一步引いて、「私はこの人を正したいと思っているんだなあ」と自分を客観的に見つめることが大切です。

## (2) 会話の基本スキル (O・A・R・S)

家族の置かれている状況や考え方、気持ちを正しく理解し、支援者の「共感」を伝えるために情報を引き出し、整理するスキルが必要です。支援者は、下にある4つの技術 (O・A・R・S) を上手に活用できるとよいでしょう。

### ●O : Open Question (開かれた質問)

いわゆる5W1Hで聞く、「はい」「いいえ」で答えられない質問は、家族がどういった気持ちで来所したのか、問題をどう認識しているかなどを引き出すことができるのと同時に、家族が相談したい話題や葛藤を明確にすることができます。

### ●A : Affirm (認める、是認)

家族の具体的な行動から読み取れる強みや前向きな姿勢を支持したり、敬意や配慮を示したりすることで、家族がより率直に自分の考えや気持ちを話せるように促します。

是認は、お世辞や本心でない褒め言葉、やみくもな励まし、支援者の評価とは異なります。混同しないように注意しましょう。

### ●R : Reflective Listening (聞き返し)

相手の言葉や心の中の思いを想像し、つぶやくように確認するのが聞き返しです。コツは相手と自分の間に言葉を大切にそっと差し出す感じで言うことであって、自信なさそうに言うことや下手に出ることではありません。

語尾を上げず、ゆっくり落としたトーンで話すと、家族は追及されたり応えることを要求されるような圧力を受けません。ここが質問との違いです。一つ質問したら、少なくとも2回は聞き返しによって、確認や明確化を行います。

### ●S : Summarize (要約)

相談の場面では、相談の焦点がぼやけてしまうことがよくあるため、面接の要所で相手の言葉を要約し、家族に伝えるようにします。その際は、ポイントは1つか2つに絞り、あまり複雑になりすぎないように注意しましょう。

● O : Open Question (開かれた質問) の例

「どのような訳があったのでしょうか？」  
 「それはどんなふうに始まりましたか？」  
 「今日は何について話せると良いでしょうか？」

● A : Affirm (認める、是認) の例

「そんなに大変な状況のなか相談にいらして下さったんですね」  
 「話しにくい内容のお話を正直に聞かせてくださいましたね」

● R : Reflective Listening (聞き返し) の例

① 「単純な聞き返し」

家族が話した言葉をそのまま繰り返したり、支援者の言葉で言い換えたりするものです。聞き返しを行うことで共感的な雰囲気を高めていくと同時に、面接のポイントを確認することができます。



② 「複雑な聞き返し」

家族の言葉にならない気持ちや思いを想像しながら言葉にして返すことによって、意味や感情の明確化を図ろうとするものです。



● S : Summarize (要約) の例

「今日のお話ですが、息子さんが薬物を使っているようで、携帯の電話番号を消したり、当たってしまったたり、対応が難しく感じていらっしゃる。良いやり方を知りたくて、思い切って来られたのでしたね。」

### (3) 助言や知識を伝えるためのスキル (E-P-E)

(E-P-E)とは、「動機づけ面接 (MI-Ⅲ)」で行われている情報提供の方法で、英語の「Elicit (引き出す) - Provide (提供する) - Elicit (引き出す)」の頭文字をとったものです。この方法は、支援者が家族に提供したいと思った「情報」を「質問や聞き返し」でサンドイッチにすることです。

#### ●最初のElicit (引き出す)

↓  
アドバイスの前に、既に持っている知識や関心を尋ね、伝える内容の焦点を絞ります。またアドバイスをする前には必ず許可を求めます。いきなりアドバイスを始めるのではなく、こうすることで相手に情報を受け止める準備ができていくのです。

「いいえ、今日は話をきいてもらっただけで十分です」などと言われたら、面接内容を要約して共有し、助言はせずに終了します。

#### ●Provide (助言や知識を提供する)

↓  
専門用語は避け、家族が理解しやすい言葉で伝えましょう。内容は1つか2つに絞り、家族が受け止めきれぬボリュームにすることも必要です。

#### ●最後のElicit (引き出す)

アドバイスしっぱなしは良くありません。家族の理解や解釈、反応を探り、アドバイスの内容が適切か確認しましょう。「まず〇〇からやってみます」「〇〇なら出来そうです」などの言葉が家族から出てくれば、アドバイス成功です。反対に「ちょっと難しいですね」などの反応であればアドバイスが不適切です。その時には最初のElicit (引き出す)に戻ります。

#### Elicitの例

##### ●最初のElicit (引き出す) の例

「今まで〇〇についてどんな話を聞いたことがありますか？」  
「もう少し知りたいことはどんなことでしょうか？」  
「私から一つアドバイスがあるのですが、聞いていただけますか？」  
「ちょっと提案してみてもいいですか？」

##### ●最後のElicit (引き出す) の例

「今お話しした内容は理解できましたか？」  
「お伝えした内容をどのように感じましたか？」  
「今のアドバイスの中で、使えそうなものはありましたか？」

## (4) 家族の行動の変化を促すためのスキル

面接には、情報収集やアセスメントのための面接と対話を通して家族が行動や気持ちを変えていくことを目指した面接の2種類があります。ここでは、主に後者の面接で役立つ4つのポイントについて解説します。

### ●ポイント①：説得ではなく、家族の持つジレンマを明確にする

家族は、「対応を変えなければいけない」⇔「そうすると本人がどうなってしまうか心配」という二つの対立した気持ちを行ったり来たりするジレンマ状態になることがしばしばあります。例えば、家族が暴力を振るわれている場合、「暴力から離れたい」⇔「私がいないと薬物使用が悪化するだろう」という両方の気持ちが同時に存在することは当たり前のことです。

そのような時、支援者が一つの方向に引っ張ろうとすればするほど、家族の心には反対の方向に引っ張り返す力が働くのです。結果的には、助言を実行できない様々な理由を引き出して、現状維持することになってしまいます。さらに、支援者と家族の関係性にも不協和が生じてしまいます。

そんな時は、「本人と距離を取りたい。一方で（または、「と同時に」「そして」などの言葉でつなげて）一人で生活させるのも心配なんですわね」

というように「両面への聞き返し」を行うことにより、家族は相反する考えや感情が自分の中に同時に存在することを理解できます。人は自分の中の矛盾を良く観察することが出来ると、それを解消する方向に行動を変えることが出来ます。

### ●ポイント②：価値を明確にし、それに沿った行動を選べるようにする

人は目の前の不安や焦りで余裕がなくなると、自分が大切にしている価値が見えなくなってしまい、状況反動的な行動をしてしまうことがあります。しかし、もう一度自分の大切な価値観を意識するとその価値観と矛盾する行動を変え、価値観に見合った行動を選び直そうとする力が湧いてきます。

隠れている感情や価値を明確化する働きかけを支援者が行うことにより、家族は自分の大切な価値観に見合う行動を選ぶ準備を始めることができます。

### ●ポイント③：家族自身に「変わること（変化）」を語ってもらう

支援者は変化についての話を引き出し、これからの計画について具体的かつ詳しく話してもらうよう働きかけましょう。家族自身が変化に関する言葉を語るほうが、支援者が指導するよりも実際にその行動を行う可能性は高まります。

これらの発言を引き出すためには、オープン・クエスチョンで質問するほか、聞き返しや是認を用います。

### ●ポイント④：変化に対する重要性和自信を高める

支援者が変化について悲観的になっていると、家族も希望を持つことが出来ません。まず、支援者が前向きな姿勢を持つようにしましょう。そして、家族が今後の変化に自信をもてるような会話をすることも大事です。

また、達成しやすい小さな目標を設定して成功を体験してもらうことも大切です。

変えていける自信と同時に、薬物の問題に取り組むことがとても大事だと思えたら、変化への意欲は高まります。取り組むべき大事なことだと家族が意識出来るような働きかけは重要です。大変な状況の中、それでも相談に来ている家族の姿勢や気持ちを是認し、継続相談につないでいきましょう。

#### 4つのポイントの例 ①

##### ●ポイント①：説得ではなく、家族の持つジレンマを明確にする説得の例

「家を出なさい」「本人を放り出さない」

などと説得したら、家族の気持ちはどのように動くでしょうか？

自立のために本人を家から出しましょう！



あの子を一人で生活させるのは心配なんです。



では、同居前提で対応を考えましょうね。



でも、これ以上あの子にかかわるのはうんざりなんです…。



##### ●両面への聞き返しの例

世話焼きは本人のためによくないとわかっているんですが、つい心配になって手を出してしまうんです。



心配でたまらなくなり手を出してしまう。

一方で、このままでは本人の回復のためにならないという気持ちもある…。



そして、新しいことをしてみようという気持ちになった。そんな感じですか？

●ポイント②：価値を明確にし、それに沿った行動を選べるようにする聞き方の例

「もともと、どんな家族をつくろうとしてきたのですか？」

「どのようなことを子育ての中で大切にしてくださいましたか？」

「今、そこに立ち戻ると、どのようなやり方を思いつきますか？」

●ポイント③：家族自身に「変わること（変化）」を語ってもらう例



(欲望) 「笑顔でおはようといえるようになりたいです」

(能力) 「これくらいならやってみることができます」

(理由) 「家族会に行って勉強した方が近道だってわかりました」

(必要性) 「顔を見れば文句を言うパターンを変える必要がありますね」

(具体的取り組み) 「次の家族会に夫と行けるように、今晚参加申込みしてみます」

「他には（どんなことがありますか）？」

「良いアイデアですね。そのことについて、もう少し教えてもらえますか？」



4つのポイントの例 ④

●ポイント④：変化に対する重要性和自信を高める質問の例

これまで何度も試したんですけど、結局すべてうまくいかなかったんです…。

何度失敗しても、チャレンジし続けたということなんですね。



これまで試したことで少しでもうまくいったのはどんなことですか？

●自信を高める質問例

「今までにやったことでわりとうまくいったのはどんなことですか？  
 どんなに些細な事でも構いませんよ」  
 「これまでの大変な中でも、あきらめずにここまでできたのは？」

●重要性を高める質問例

「これまでの大変な中でも、あきらめずにここまでできたのは？」  
 「このまま何もしないでみると、3年後にはどうなってしまうでしょうか？」  
 「今、一番心配していることはどうなってしまうことですか？」  
 「このテーマはあなたにとって、何番目に重要なことですか？」  
 「それが4番目、5番目ではなく、2番目なのは？」

## 2. インテーク・アセスメント

### (1) インテーク・アセスメントシート (p. 15) の使い方

インテーク・アセスメントは、緊急支援の必要性や今後の支援の方向性を見立てるために行うものです。ただ、詳細な情報を聞き取るだけで得られた情報をしっかりと見立てに活かすことができなければ、家族に余分な負担をかけるだけでなく、支援者との信頼関係構築を妨げることもなりかねません。家族には、なぜこれらの情報を聞き取る必要があるのか事前に説明して理解を得るとともに、質問攻めにならない自然な流れで必要最小限のことを無駄なく聞くことを心掛けましょう。情報を聞き取る目的や着眼点、重要な聞き取りポイントなどは、表2「インテーク・アセスメントシートの使い方」を参考にしてください。最初から漏れなく完璧な聞き取りをすることよりも、共感的な態度や支援への積極性を示し、初期段階の基本的な信頼関係を構築することのほうが大切です。

インテーク・アセスメントシートの☆は、緊急対応の判断に重要な事柄ですので、初めての電話を受けた時に確認しておくようにしましょう。

表2 インテーク・アセスメントシートの使い方

シートの番号	■ 聞き取る目的	☆ 留意すること
1～3番	■ これらの情報は、薬物関連問題について家族が既にどのような情報をどれくらい持っているのか予測し、今後必要となる支援を考えるのに役立つ。 ☆ 家族がこれまでどのような支援を得て、そのなかで何をできてきたか確認する。	
4番	■ インテーク・アセスメントの結果を整理し共有する中で、家族と支援者が合意できる妥当な支援目標（17番）にたどりつくことを目指す。 ☆ 家族の来所時のニーズをそのまま書き込む。 ☆ 家族の願いや要望が不適切なものに感じられたとしても、それを直接的に否定したり、無理に修正したりしない。	
5番		☆ 家族や本人と身近な関係にある親族の情報を中心に整理する。 ☆ 家族関係の改善や再構築のためにも重要なので、家族構成だけでなく、お互いの関係性についても把握しておく。 ☆ ジェノグラムは3世代まで遡る必要はないが、アルコール・薬物の問題や精神疾患が疑われる親族の情報は書き留めておく。
6番		☆ 何歳からどんな薬物をどれくらいの頻度で使っているか、薬物関連問題がどれくらい本人と家族の生活に悪影響を与えているかなどを記入する。
7番		☆ これまでの依存症治療の経験や相談歴、現在の意欲などを記入する。
8番	■ 本人の就労状況や経済的自立度も重要な情報の一つである。 ☆ 幼少期の様子、学校生活上の問題（不登校、いじめ、成績不振など）の有無、養育体験上の問題（虐待、親との離別など）などを中心に、情報を時系列に整理する。	

表2 インテーク・アセスメントシートの使い方（続き）

シートの番号	■ 聞き取る目的	☆ 留意すること
9番	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 現在の精神状態（精神症状、うつ、不安など）の他に、摂食障害や発達障害の可能性も視野にいれながら、既往歴についても情報収集する。</li> <li>■ 自傷については必ず聞き、緊急対応の必要性を検討する際に役立つ。デリケートな問題だからと支援者が変に緊張すると、家族はかえって話しづらくなる。自傷経験がある場合は、方法、程度、頻度、エスカレートしているかどうかなどを確認する。</li> </ul>	
10番	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 本人に関する情報の中には、薬物関連問題とあまり関係ないと思えるものが多数含まれているが、これらの情報を幅広く得ておくことは、本人が抱える生きづらさがどれくらい深刻であるか、それを乗り越えて、薬物に頼らず生活していくために今後どれくらいのサポートが必要かを考え支援を検討していくためにとても重要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 感染症（C型肝炎、HIVなど）などの身体疾患に関する情報の他、現在の健康状態（極端な痩せ、衰弱など）についても書き留めておく。</li> </ul>
11番	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 薬物関連問題の解決に向けた家族の積極性を確認する。</li> <li>■ 家族の中には、本当のことをいうとこれ以上本人に関わりたくないとか、できることなら本人から逃げ出したいという気持ちを持っている人もいるので、世間体や建前でない家族の本当の気持ちを引出し、家族のニーズに沿った支援を行うことが必要である。</li> <li>■ 一見すると薬物関連問題の解決にむけて非常に消極的でも、実は自信のなさがその大きな原因であるということもあるので、真のニーズを見誤ることがないようにしっかりと家族の気持ちに寄り添うことが大切である。</li> </ul>	
12番	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 極端な貧困状態がないかなどを確認する。</li> </ul>	
13番		<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 家庭内で暴力が起きているなど、薬物以外の重要な問題がある場合に書き留めておく。</li> </ul>
14～15番		<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 緊急時の対応が必要になる典型的な例については「3. 緊急対応を検討すべき状況と対応方法」(P. 16) も参考にするとよい。</li> </ul>
16～17番	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 最後に、聞き取った情報を整理して課題を明らかにし、今後の支援目標を家族と共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ この時点での支援目標は、「本人を回復のための社会資源につなげる」「本人との関係性をもう少しよくする」「家族の生活を安心、安全なものにする」など大まかなものでよい</li> <li>☆ 家族の関心が強い目標を一つか二つ設定し、以降の継続面接につなげる。</li> </ul>

## インタビュー・アセスメントシート

相談者氏名	記録者氏名	実施日	年	月	日
1.相談経路		5.家族構成（ジェノグラム）  ☆家族の中に緊急介入の必要な人は？			
2.これまでの相談歴の有無    あり    なし					
3.相談歴の概況					
4.主訴・来所目的					
<b>薬物乱用者本人に関する情報</b>					
6.薬物使用状況    （使用開始年齢、使用薬物、使用頻度）			9.精神的現症  ☆自傷他害につながる精神症状は？		
7.薬物関連問題の治療に対する意欲					
8.生活歴・教育歴・司法矯正歴					
			10.身体的現症  ☆生命の危機は？ （衰弱や自傷他害の程度は？）		
11.相談者の薬物関連問題解決に向けた意欲		12.経済状況  ☆極端な貧困状態は？		13.薬物以外の深刻な問題  ☆家庭内に暴力は？	
14.緊急対応の必要性    あり    なし					
15.緊急対応を必要とする理由					
<b>結果の整理と今後の支援</b>					
16.課題と背景要因					
17.今後の支援目標					

### 3. 緊急対応を検討すべき状況と対応方法

#### (1) まず緊急の対応が必要かどうか確認しよう

家族と最初の相談・面接を行う際、表3「緊急対応が必要な状況の例」(p. 17)を参考に、相談に至った家族と本人の置かれている状況が「緊急の対応が必要な状態」ではないか確認してみましょう。ここでいう「緊急の対応が必要な状態」とは以下の状況を指します。これらの判断に迷う場合は職場の上司や同僚に相談してみましょう。

- ① 薬物を使用している本人の身体状況の衰弱などが深刻である場合
- ② 薬物を使用している本人が幻覚妄想状態や極度のうつ状態などに陥っており、自傷他害のリスクが高いと判断できそうなとき
- ③ 相談者である家族が薬物を使用している本人から深刻な暴力を受けており、早急に避難が必要と判断できそうなとき
- ④ 相談者である家族自身が非常に疲弊し、その結果非常に重いうつ状態や希死念慮などに陥っている状況にあるとき
- ⑤ 相談者である家族が極度な経済的困窮状態にあると考えられるとき

#### (2) 「緊急の対応が必要な状態」があれば、急いで緊急対応をしよう

緊急の対応方法について迷いがあれば、ここでも職場の上司や同僚への相談をし、必要な場合は関係機関にも相談して対応を進めていきましょう。

#### (3) 「緊急の対応が必要な状態」がない、または改善されたら、「今日の相談シート」(p. 20)を活用し面接相談を継続しよう

インテーク面接や継続的に相談を行っていく中で得られた情報を「インテーク・アセスメントシート」(p. 15)を活用して整理しながら収集し、援助の方向性の検討に役立てましょう。その際には、一度の面接ですべてを聞き取ろうとするなど、情報収集をすることが目的にならないように注意することが大切です。情報は相談を進める中で少しずつ集めていきましょう。

図3 緊急対応の判断と対応のながれ

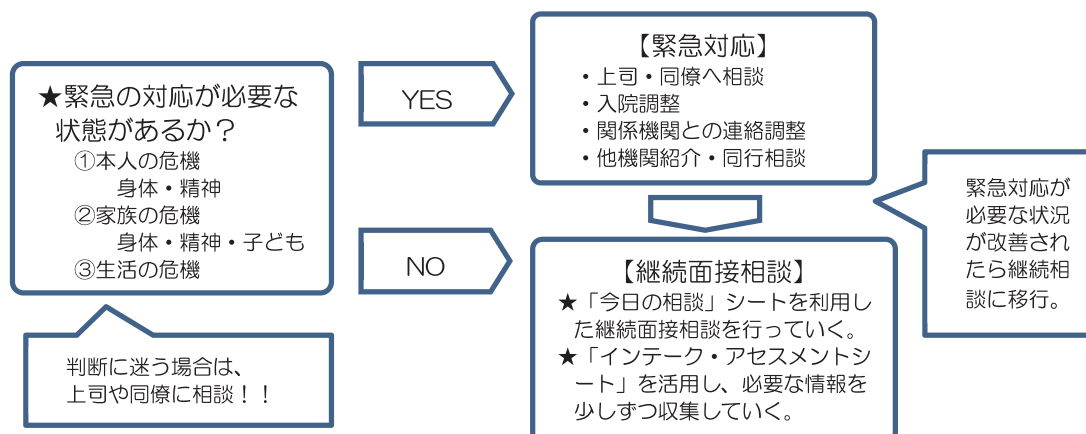


表3 緊急対応が必要な状況の例

	事 例	内 容	⇒	対 応
① 本人の危機	本人が衰弱死しそう	本人が何日も部屋から出てこず、ベッドに横たわったまま食事も水分も摂っている様子がない。声をかけても返事がなく意識がもうろうとしている。	⇒	何らかの身体合併症が深刻な状態を引き起こしている可能性を考え、緊急訪問での本人の身体状況の確認や救急搬送などを視野に対応を検討する。
	本人の妄想から他害に発展	本人が「組織から狙われている。お前らも組織の手先だ。やられる前にやってやる！」などと訴え、家族に対して刃物を持ち出して危害を加えようとする。	⇒	幻覚や妄想といった病的体験に基づいた精神病状態を呈している可能性があり、そのうえで家族に対して他害行為に及ぶ可能性がある。家族の安全を確保するとともに、医療保護入院や措置入院の可能性を視野に入れる。
	自殺してしまうかも	本人が「自分なんかいなくなった方がいい」「死んだ方がまし」などと頻回に訴え、インターネットで死ぬ場所や手段を検索し、ロープを用意するなど、自殺するための準備を具体的に進めている。	⇒	具体的に自殺の手段を検討しており、本人に極度のうつ状態や強い自殺企図があることが考えられ、自殺のリスクが高いと判断できる可能性が高い。自殺のリスクを回避するために、医療保護入院を視野に精神科医療機関と連絡調整を行う。
② 家族の危機	暴力がひどい	本人から妻への暴力が毎日行われ、妻に対する行動の監視や制限もしている状態。妻には全身に痣があり、本人の目を盗んでようやく相談に来た状態。	⇒	本人からの暴力が家族の身体と精神に深刻な影響を及ぼしている状態と判断できる。警察や女性相談機関、福祉事務所などと連携し、家族の避難先の確保を検討する。
	家族はもう限界	家族自身が「(本人を) 立ち直らせるためにいろいろやってきたがもう限界。私が死にたい」などと訴え、顔色もさえず身だしなみも整えることができない。家族自身が食事も摂れておらず、家事もできていない状態が続いている。	⇒	家族自身が疲弊し極度のうつ状態に陥っており、正常な判断もできない状態になっている可能性がある。家族自身の休息や精神科治療を視野に対応を検討する。
	子どもは安全?	本人が子育て中。子どもをかわいがってはいるが、薬物をやめさせたい家族との言い争いが絶えない。	⇒	暴力や育児放棄がなくても、薬物使用をめぐる大人の会話を聞くことや、使用中の姿を見ることは、子どもの身体と精神に深刻な影響を及ぼしている。子ども家庭支援センター、児童相談所などと連携し、子どもの心身の安全を守る対応を検討する。
③ 生活の危機	もう食べ物もない!	本人が仕事を辞めてしまい収入が途絶えている上に、本人が作った借金の返済もある状態で、家庭には現金が数百円しか残っていない。妻と小学生の子どもたちは今日食べるものがなく困っている状態。	⇒	家庭全体が極度の経済的困難に直面しており、放置すれば生命的な危機状態になりえる状態。福祉事務所と連携して相談を進めていく。

## 4. 継続面接

### (1) 今日の相談シート (p. 20) の使い方

今日の相談シートは、面接を進めやすくするためのツールです。支援者が面接中に面接の展開の仕方を確認したり、家族と相談内容を共有したりすることに役立ちます。家族の話をただ聞いているだけだと、「話は聞いてくれるけれど、どうしたらよいか何も教えてくれなかった」と不満を持たれる場合があります。

一方、家族の質問に一つ一つ答えていると、いつのまにか時間が超過してしまうこともあります。家族の面接に対するニーズ、支援者側が感じる課題の両方をつかみ、効率的に時間を使うためには、面接を構造化することが必要です。

シートは、STEP1～3の三段階で構成されています。

#### ● 「STEP1：今日のテーマ」

家族と信頼関係を構築し、話題設定とその取り上げ方・扱い方の決定（アジェンダ・セッティング）を行います。

#### ● 「STEP2：今日学んだこと・支援者からのアドバイス」

アセスメント、プランニング、情報提供などの方法を用いながら、STEP1で決めた話題を進めていきます。

#### ● 「STEP3：次回までにやってみること」

次回までにやってきてもらう内容を具体的に決めること、次回の約束をして面接を終了します。各段階のポイントや積極的に用いるスキルについては、表4「今日の相談シートの使い方」を参考にしてください。

表4 今日の相談シートの使い方

シートの番号	◆ ポイント	◇ 積極的に用いるスキル
STEP1	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 面接の2割程度は、信頼関係構築のために使う。</li> <li>◆ 家族の言うことに一問一答方式で答えていくのではなく、まず、取り上げたいことをいくつか引き出し、その中から今日取り上げるべき重要な課題を決める。</li> <li>◆ 課題が決まったら、支援者はその課題にどう取り組むのがよいか考え（アセスメント/プランニング/情報提供など）、家族に提案する。</li> <li>◆ 最初はSTEP1に時間がかかるが、相談回数を重ねるうちに、残りの部分に時間をかけることが出来るようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 来談をねぎらう（是認）、語られた内容の確認やリフレクティブ・リスニング（聞き返し）、オープン・クエスチョンなどのスキル。（pp. 6-7参照）</li> </ul>

表4 今日の相談シートの使い方（続き）

シートの番号	◆ ポイント	◇ 積極的に用いるスキル
STEP2	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 関わり初期段階では、アセスメントを行い、それに基づいた適切な支援目標を設定することが多くなる。</li> <li>◆ STEP1で選ばれたテーマに対して、①情報提供(心理教育)、②今後のプランニング、③経過の報告と共有、④家族が行動を変えられるための働きかけ、⑤気持ちを受けとめ情緒的に支える、などの対応をする。</li> <li>◆ プランニングや情報提供を行う際に、「家族心理教育プログラム」を使えそうであれば活用する (pp.21参照)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 家族自身に「変わること(変化)」を語ってもらうなど、家族の変化を促すためのスキル。(pp. 9-12参照)</li> </ul>
STEP3	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 本人の様子の観察、社会資源の情報収集、夫婦の話し合いを持つことなど、宿題を出した時には、具体的に、いつやるか？どのようにやるか？などを家族自身が話せるように働きかけ、動機づける。</li> <li>◆ 最後には、「今日の面接では聞きたいことが聞けましたか？」「面接の感想はどうですか？」などと家族からフィードバックをもらう。</li> <li>◆ 次の面接の日時と次の回で扱うテーマ(予定)を決める。</li> </ul>	

この相談シートはいろいろな使い方ができますが、以下に使い方の例を二つ紹介します。

●例1：支援者が面接の流れを記録するために使う

例えば、STEP1には、家族が今日取り上げたい内容として語ったことを忘れないようにメモしておき、最終的に決まったテーマ(例：本人を受診させたい)を丸で囲んだりアンダーラインを引いたりします。今日の面接時間をどう使って課題を達成するかアイデアも簡単にメモしておきます。(例：受診の勧め方を振り返ることと、今後について新たなアイデアを出すこと)

STEP2には面接で話し合われたことをメモします。例としては、「受診を勧めるときのいつものパターン」、「心理教育の資料を活用した結果どんな改善点が見つかったのか」、「それを活かしてどのように計画したか」などです。

STEP3では、次回までの宿題を記録し、支援者はこの記録を見ながら今日の面接内容をまとめて家族に返し、また、家族からフィードバックをもらいます。

●例2：今日の面接の要点を確認するために家族と支援者がシートを共有する

面接場面で家族は緊張していることが多く、面接で話し合ったことを後から思い出せなくなったり、宿題があいまいになったりします。そのような結果を避け、家族が自宅でも面接内容を復習出来るためにシートを用います。

この場合は、重要ポイントを絞り、家族にとって明確でわかりやすくすることを意識して記録する必要があります。細々したことを記録するのではなく、決めたテーマや、今日の面接の中で得た新しい知識や方法、次回までの課題など、を記入します。このような使い方をすることは、家族自身に忘備録として記入してもらうという方法もよいと思います。また、面接が終わったらシートをコピーして、両方が保管できるようにするとよいでしょう。



年 月 日

## 今日の相談シート

STEP1 : 今日のテーマ

STEP2 : 今日学んだこと・支援者からのアドバイス

STEP3 : 次回までにやってみること

次回相談日 年 月 日

### (3) 薬物依存症をもつ家族を対象とした心理教育プログラム～ファシリテーター用マニュアル～を活用するためのリスト

家族の関心事・テーマ	心理教育プログラムの該当箇所	該当ページ
1. 薬物依存症がどんな病気か知りたい。	「薬物依存症とは」	2-3
		「薬物による脳や体の医学的イメージ」
2. 本人はなぜ薬物をやめられないのかその理由が知りたい。	「薬物依存症の仕組みを知ろう」	10-13
	「薬物依存症の仕組みを知ろう」	10-13
3. 本人が薬物依存症になった理由を知りたい。	「薬物が与える影響（ダメージと魅力）を知ろう」	4-5
		「薬物依存症の仕組みを知ろう」
4. 薬物使用の害について知識を得たい。	「薬物による脳や体の医学的イメージ」	6-9
	「薬物依存症の回復に必要なことを考える」	14-15
5. 薬物依存症からの回復過程や回復のための方法を知りたい。	「依存症者本人の長期的な回復」	27
	「多様な回復」	66
6. 薬物依存症の回復を支援する関係機関について情報が欲しい。	「薬物依存症の回復に必要なことを考える」	14-15
	「設立つ社会資源」	67-68
7. 再発について学び備えておきたい。	「薬物依存症の自助活動（ダルクとNA）と12ステップ・プログラム」	69
	「薬物の再使用・依存症の再発についての理解と対応」	32-33
8. 本人をなんとかして治療につなげたい。	「本人に対して治療の提案をする前に必要な準備」	23-25
	「コミュニケーション・スキルの練習 課題5」	60-62
9. 本人との関係を良くしたい。	「望ましいコミュニケーションのための5か条」	17-22
	「コミュニケーション・スキルの練習 課題1～4」	43-59
10. 本人に対する上手なコミュニケーションを身につけたい。	「依存症の回復における家族の関わり方を考える」	28-31
	「依存症者本人の回復段階に応じた家族の対応」	63-65
11. 本人の回復を上手に応援できるようにになりたい。	「共存とイネイプリング」	70-73
	「回復しつつある本人と新たな関係を築く」	84-86
12. 薬物使用が止まったあとと本人への関わり方を知りたい。	「薬物問題を経験したあとの新しい生活」	87-88
	「家族のセルフケア」	34-41
13. 家族の生活を立て直したい。	「家族関係を見直す」	74-78
	「暴力について」	95-103
14. 家族が元気を取り戻す方法を知りたい。	「本人の暴力から身を守るために」	104-111
	「本人の望ましい行動を増やし、望ましくない行動を減らす」	79-83
15. 家族関係をもっと良くしたい。	「逮捕や裁判を本人の回復のきっかけにする」	89-90
	「暴力を避けて安全な生活をしたい。」	91-94
16. 本人以外の家族関係の問題に取り組みたい。		
17. 暴力とはどういうものかきちんと理解したい。		
18. 本人からの暴力を避ける方法について考えたい。		
19. 暴力を避けて安全な生活をしたい。		
20. 本人の良い行動を増やすために家族ができることを知りたい。		
21. 本人の問題行動を減らすために家族ができることを知りたい。		
22. 逮捕や裁判について知識を得ておきたい。		
23. 逮捕や裁判のとき家族はどうしたらよいか知りたい。		

薬物依存症者をもつ家族を対象とした個別面接の進め方  
－支援者用マニュアル－

平成30年（2018年）3月発行

作成 東京都多摩立川保健所

監修 近藤あゆみ 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター

高橋 郁絵 原宿カウンセリングセンター

発行 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所 薬物依存研究部

※この冊子は、東京都の許諾を得て「薬物依存症者をもつ家族を対象とした個別面接の進め方－支援者用マニュアル－（東京都福祉保健局）」の一部を改変し、精神保健研究所薬物依存研究部が作成・発行しています。  
(29立保企第1335号)

